

た ち ば な



目次

病児保育室開室式 尾池総長あいさつ	1
女子高生・車座 フォーラム2007	2
参加高校生 アンケート結果 ダイジェスト	3
データで見る女性の 躍進(2) (伊藤公雄先生)	4
センター移転先の 改修が始まりました	4

病児保育室
利用の流れ

①事前登録

利用申込みとは別に、事前に登録票を送付してください。

②事前診察

感染症や重大な病気にかかっていないことを確認してもらってください。

③利用予約

電話をしてください。

④来室

利用申込書、お医者さまからの連絡票を持ってきてください。

⑤託児

⑥お迎え



病児保育室開室式 尾池総長あいさつ

皆さん、おはようございます。たくさんの方に集まっていたいて、ありがとうございます。

昨年、2006年9月5日に、本学は女性研究者支援センターを設置いたしました。その事業の一つとして、病児保育室を設置することが予定されていました。このたび、学内関係者のご努力によって開室することができました。医学部附属病院からのスペースのご提供と、設置に当たっての種々のご努力のお陰でもあり、この場を借りて、みなさまに深く感謝申し上げます。

自然の木を使用した快適な保育室が完成し、喜ばしいことです。和歌山の研究林の間伐材を使用してくれたのなら、なお喜ばしいことです。

さて、本学には約3千人の常勤教員がありますが、そのうち女性教員は約200人で10%にもなりません。女子院生は約2,200人で、学生12,000人に対する女性の割合は、教員に比べ、高くなっております。この病児保育室の設置は、彼女達への育児支援を具体的な形にしたものです。

私が尊敬する学長の一人である、ストックホルム市カロリンスカ・インステテュートのヘンリクソン氏が、「大学に入学する女子学生は、全体の半数いるのに、研究者の中には女性が少ないので困っている」との話しをされたことがあります。では、女性研究者は、研究者全体の何割なのかと聞けば、「たった30%」だとのこと。これからは、日本はいかに遅れているかということ、まだまだ貴重な人材が確保できていないことがわかります。病児保育室の開室は、育児等で研究や仕事を中断している人



材を確保するための1ステップになると考えています。

今、私は一人暮らしをしています。妻が孫の世話に行っているためです。もちろん、自分で弁当を作っています。このような毎日の中で、「子育ては皆でやるもの」であることを実感しています。育児にしても介護にしても、皆で協力して支援していくもの、というのが京都大学の基本方針です。その1つである病児保育に関する支援が実現したのは、喜ばしいことです。

この病児保育室の設置は、京都大学の長年の念願が、文部科学省科学技術振興調整費の助成を受けることによって実現したものであるため、決められた枠組みの中で運用していかなければなりません。本日、ここに開室した病児保育室は、原則として本学の女性が利用できることと内規には書いてあります。これは、女性研究者支援センターの事業であり、京都大学としても初めての試みなので、まずここから始めてみようということです。運用を始めて、今後どのような需要があるかを見て、大学としては将来の方向を考えていこうという所存です。

最後になりましたが、病児保育室開室に当たりご協力くださいました関係各位、ならびに本日ご参加のみなさまにお礼を申し上げますとともに、今後とも皆さまのご支援をお願いして、病児保育室発足に当たっての私のご挨拶とさせていただきます。



病児保育室、女性研究者支援センター関係者

女子高生・車座フォーラム2007



鈴木晶子先生による「基調講演」

去る2月3日（土）、女子高校生向けに「車座フォーラム2007」が開催されました。このフォーラムは、研究者と直接に触れ合う機会を通して、研究者という仕事が多様なものか、また研究者として生きることの楽しさや苦悩などについて女子高校生に知ってもらい、研究者の道を志す人が一人でも増えてほしいという願いのもとに企画されました。会場となった清風荘は、元公爵・西園寺公望の京都別邸として使用されていた歴史的建造物です。当時の名工・八木甚兵衛の作庭で知られる庭園を望みながら、和室で、大学の教員と車座になって語り合うことで、普段の学校とは一味違った空間と時間を体験してもらおうという趣向です。

女性研究者支援センター発足からわずか5ヶ月という準備期間のため、募集開始が遅れたにもかかわらず、問い合わせも多く、応募者は30名の定員に達しました。京都をはじめ近県から高校1年生、2年生の女子生徒が集まってきました。大学側からは12名の女性教員のほか、男性教員数名、院生、学生など会場案内係もあわせると25、6名が迎えました。前日は雪が降り、慣れない日本家屋の寒さにみんな大丈夫かと案じていましたが、フォーラム当日は快晴のお天気に恵まれました。

まず、第一部の全体会では、登谷美穂子・センター特任教授の司会のもと、松本紘副学長・理事からご挨拶があり、続いてセンター地域連携主査の鈴木晶子・教育学研究科教授による基調講演「女性と学問」が行われました。「一、科学は日常に宿る」「二、科学の影には人あり」「三、分かるということには深さがある」という三つの原理について話されました。①日ごろ身の回りにある物や事柄、人の有り様に対する興味関心から着想するという、科学的発見の面白さへのセンスは若いときから磨いていくことができる、②科学の成果は研究者の苦楽を伴う仕事の汗によって生まれたものであり、興味をもった本や研究の情報に出会ったら、その本の著者やその研究をした人を実際に訪ねて直に話をきいてみる、③一冊の本でも何度も繰り返し読んでいくと、読むたびごとに著者がいわんとしていることの深みがみえてくる、といった研究への道筋についての話には、高校生たちは

熱心に耳を傾けていました。

その後、第二部では3つのグループに分かれることになっていましたが、どのグループにいくかを選んでもらうため、グループごとに講師役の教員紹介が行われました。講師の先生方はA室：伊藤公雄(文学研究科)、鈴木晶子(教育学研究科)、田口紀子(文学研究科)、松宮由美(化学研究所)、B室：小森宏美(地域研究統合情報センター)、西村いく子(理学研究科)、野口順子(理学研究科)、宮部貴子(霊長類研究所)、C室：押川文子(地域研究統合情報センター)、齋藤啓子(工学研究科)、中西麻美(フィールド科学教育研究センター)、松下佳代(高等教育研究開発推進センター)の12名です。生徒さんたちはそれぞれ希望する部屋に分かれ、一時間半あまりにわたって、様々なテーマについて討論しました。研究者の苦労や大変さ、女性として人間として生きることと研究者の仕事とのかわりについて、率直かつ本質的な質問を投げかけられ、それに答えるなかで講師自身も自分の原点にかえて新鮮な気持ちになりました。中には、高校で今やっている自由研究の論文のまとめ方について具体的な質問が出て、即、論文指導の大学のゼミのような展開になったり、また学生や院生が自分の研究テーマを紹介したりといった場面もありました。長時間畳に座るので、ちょっと足がしびれて困ったという声も聞かれましたが、お茶とお菓子をいただきながら、ラフな雰囲気の中で楽しく活発な話し合いが続きしました。

最後に全体のまとめの会では、各部屋の話し合われた内容について短い報告があり、センター所長の塩田浩平・医学研究科教授のご挨拶で締めくくられました。休憩時間はもちろん、散会後も、講師や院生・学生をつかまえては積極的に話にいく生徒さんたちの姿がとても印象的でした。高校生が学問や研究について、また女性が専門職に就くことについて大変高い意識と関心をもって、自分の将来についてしっかりした目的意識をもとうと色々迷い、模索していることが今回の対話を通してよくわかりました。もっと時間がたっぷりあったらよかったという感想もきかれました。今後この車座フォーラムはセンターとしてもさらに発展的に継続していきたいと考えています。皆様のご理解、ご支援、ご協力を今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



参加高校生アンケート結果ダイジェスト

＜参加の動機は？＞

- ・私も研究者になりたいと思っていたから
- ・研究の楽しさ、研究者とはどんなことをしているのか、どんな生活をしているのか知りたかったから
- ・どうやったら研究者になれるのか、育児休暇、研究者の職場復帰の可能性についてききたかったから
- ・研究者の生の声を聞きたかったから
- ・将来のヴィジョンを明確にしたかったから
- ・どのような研究をどういう環境でしているか知りたかったから
- ・研究に興味があり、将来を考える上で手助けになると思ったから
- ・先生方に大学のしくみや研究の詳しいところを聞きたかったから

＜フォーラムの内容に関する感想＞

- ・本当に楽しかったです。私が聞きたいと思っていたことはすべて聞かせてもらえちゃって、とても贅沢でした。いろいろな先生がいろいろなことを教えてくださり、知りたいと思っていたこと以上にいろいろと知れて、本当に研究者に興味がわきました。すごく話しやすい環境でした。
- ・学問とはどういうものか最初に聞いて、自分の勉強について改めて考えさせられた。他の人間との出会いが人を変えるというのは意外だった。自分自身、どこに行くとか決めていても、この先変わっていくこともある。人生は未知の部分があるのだと思った。
- ・学問への道は意外と身近にあり、また色々な方面に広がっていることが分かった。「誰にも成すべきことがある」というのを聞いて少し元気づけられた。
- ・実際に行っている具体的なことから、大学院の実態、学部の広がりなど大きなことまで色々なことを聞き知ることができた。将来のことを考えるのにとっても参考になった。
- ・青いバラの話のように具体的に実験の話がすごく面白かった。

＜女性研究者のイメージは変わりましたか？＞

- ・ものすごく変わりました。
- ・研究者というとお堅いイメージがあったが、明るくて楽しそうだった。
- ・研究者ってインドアなイメージで自己満足の人ばかりと思っていたけど、違った。
- ・かなり変わりました。研究者は実験室にこもって分析

したりデータと向き合ってその処理をして未知の難しいことにぶつかっていつも頭を使って大変！！みたいなイメージでしたが、先生がたは本当に楽しそうで自由な感じで、研究者っていいな！と思いました。

- ・女性の研究者というと、父から女性は社会で差別されることもあり現実には厳しいと聞いていたので、自分が好きなようにちゃんと研究できるのか疑問に思っていた。だが、話を聞くと好きなことを研究できることがわかった。今日の経験を私の将来に役立てていければいいなと思った。一人で自律しようとも考えており、親だけでなく、他の人の意見も聞けてよかった。
- ・周りのみんなの意見を聞きながら、私の不安が取り除けた気がする。まだやりたいことが見つかっていない私にとって、先生方の意見は励みになった。

＜フォーラム全体の感想＞

- ・みんなで輪になってどんなことでも質問していいよーという環境で、楽しく笑いながら話せたことが本当に面白かったです。
- ・正座で足が痛いです・・・持久力ないなあ。
- ・他の学校の生徒の意見もきけてよかった。しっかりした考えをもっていることに驚いた。普段同年代の人とこのような話をする機会が少ないので楽しかった。
- ・研究者の方々を身近に感じることができたのも「場の力」のおかげのような気がします。この清風荘の場所でやれてよかったです。
- ・大人数だと雰囲気的に聞きづらかったりするけど、人数が結構少なくて聞きやすかった。
- ・明るい雰囲気です大学は素敵なところだと思いました。
- ・車座になって普段は話さないのが新鮮だった。予想以上に面白かったです。
- ・最初に思っていた雰囲気と違い、畳というのが堅苦しさを無くした。
- ・研究者になることが夢じゃなくて目標になりました。
- ・普通に高校生として暮らしているとなかなかめぐり合えない世界に触れることができたと思います。私の中で研究職というものがひとつの選択肢になりました。
- ・もっとディスカッションの時間がほしかったです。
- ・是非、第二回、第三回も開催してほしいです。薬学や物理学の先生と話す機会があればいいと思う。
- ・せっかく清風荘を使ってやるのなら自然一杯の花真っ盛りの頃、春夏にやるのはどうでしょうか。また行きたいなあ。

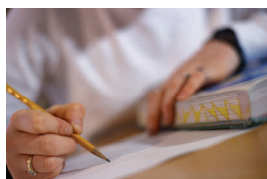


＜参加者の所属高校＞

嵯峨野高校、洛北高校、桃山高校、園部高校、亀岡高校、堀川高校、紫野高校、西京高校、滋賀県立膳所高校、同志社女子高校



データで見る女性の躍進(2)



女性の高等教育進学率をめぐって

広報事業ワーキンググループ主査
文学研究科教授 伊藤公雄

「日本の教育水準が落ちている」とよくいわれる。政府も教育再生会議などでこの問題に取り組みを強めようとしているほどだ。しかし、どうも精神論的な匂いばかりが強い気がして、「これでうまくいくだろうか」とも思う。

日本の教育水準の低下は、データの的にも確認できる。国連の人間開発計画が発表している人間開発指数（どれくらい人間性豊かな社会を実現しているかを示すもの）の変化だ。平均寿命、平均所得、教育水準を基礎とするこの指数のランキングで、1990年代半ばの日本の位

置は、ほぼ1位か2位だった。しかし、21世紀に入ると10位前後に落ちているのだ。当然、教育水準（高等教育への進学率など）の低下が転落の原因だろう。

実際、2003年のOECD（経済協力開発機構）の教育に関するデータをみても、大学型高等教育進学率で、日本は平均以下でしかない（くり返すが、これが国際比較での教育水準低下の大きな原因だろう）。特に興味深いのが男女格差だ。OECD平均では、女性51%、男性41%と、すでに10%も女性優位の状況になっている（これが、この10年ほどの各国の高等教育進学率の背景にあったのは明らかだ）のに、日本は、女性33%、男性48%と、まだまだ圧倒的に男性優位なのだ。日本の高等教育における教育の拡充を本気で考えるなら、女性に対する働きかけが緊急課題だということが、こんなデータからも見えてくるだろう。

センター移転先の改修が始まりました

女性研究者支援センターは、吉田橋町にある現在は使われていない官舎を改修し、4月に移転する予定です。この移転先建物の改修工事が、1月22日より始まりました。まずは、屋根瓦の葺き替えからです。引き続き、外壁の塗り替え、内装へと進み、3月に完成予定です。改修工事は、神吉先生を始めとする工学研究科の先生方に助けられて、着々と進んでいます。

移転先には、女性のための多目的スペースや、カウンセリング室を設置し、女性研究者支援の拠点として活動して行きます。センターの中には、女性研究者に関する書籍も揃え、少人数の会議ができる部屋も準備します。また、学童の一時預かり事業も開始する予定です。

完成後には、是非、ご利用ください。



Center for Women Researchers

〒606-8501
京都市左京区吉田本町（本部棟2階）

電話 075 (753) 2439
FAX 075 (753) 2436
Email: cwr-admin@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
HP: <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>

女性の活躍ニュース

私は、ハーバードの女性総長ではなく、ハーバードの総長です
2007.2.11ハーバード大学371年の歴史で初めての女性総長となったドルー・ギルピン・ファウスト氏（専門は米国史）の言葉です。

センターからのお知らせ

平成19年度Ⅰ期「研究・実験補助者雇用制度」利用者募集

2007.2.26締切

育児・介護中の女性研究者に対し、研究・実験を補助する者の雇用経費を負担します。

病児保育室の愛称を募集

メールにて応募してください。